「生活環境論」へのいざない
～「生活」を探求し、自然と共に生きる～

研究室紹介

三好　恵真子*，吉成哲平**

An Invitation to "Environmental Sciences": Exploring "life" and understanding how to coexist with nature

Key Words：Environmental Sciences, Interdisciplinary Approach, Dynamic and Practical Research, Sustainable Coexistence between People and Nature, History of the Asian Region

はじめに：「生活」を探求し、自然と共に生きる

戦後の社会科学において、行動科学や機能主義の隆盛に伴う科学化・計量化並びに専門分野における細分化が進む中で、それらに対峙しつつ登場した中鉢正美氏の生活構造論による広島調査[1]や石田忠氏の長崎被爆者の生活史調査[2]をその典型とし、個々の人間の「生活」を見つめながら、そこに通底する本質を見極めようとする力強い機運が高まり、1970年前後より既存の枠にはとらわれない学の創成を促していった。1972年には「人間のいるところ、かならず生活がある。」という理念を掲げつつ、それまで自明の日常性ゆえに、対象化し、体系的な知的探求の主題になりにくかった「生活」を包括的に捉え直すために、今和次郎氏ほか多様な専門分野に跨がる錚々たる顔ぶれが一丸となり、「日本生活学会」が創成された[3]。同年、斉しく我々が所属する大阪大学人間科学研究科も「「人間は何か?」を探求し続ける」という精神の元に設立されている。

その後、半世紀の月日が流れる今日、人間にとっての「生活」（生きることを意味する）を探求する研究領域として、衣食住の軸に留まらない、幾つかの潮流が生み出されている。1つに住居学、建築学、都市計画の系譜、2つに社会政策学、社会福祉学の系譜、3つに「京都学派」による生活の思想並びに文化人類学、民俗学を中心とする系譜、そして4つに「もの文化」、「宮本民俗学」等の実践学の系譜があり、造園学、土木学などの自然科学の分野との接点も探りつつ、それぞれが相互に影響し合いながら、「生活」の学の創造に向けて心血が注がれてきた。加えて、祝祭や都市など共通の学問的関心から、領域横断的なアプローチも駆使されるのと同時に、科学技術、紛争、災害など、新たに直面するグローバル・イシューに立ち向かい、リスク社会における生活の実践的側面から試みる課題として捉える重要性も唱えられるようになった。

このように「生活」を問う諸学は、時代的要請に柔軟に応答しながら確実に発展を遂げてきた。しかしその一方で、人々の生活を基軸に諸学と対話し、それらを包摂しながらインター・デシプリナリーを超えていく新たな体系的学の創成は、いまだ開拓途上にあると考えられる。なぜなら、生活の中で展開される未来への可能性をも眼差していくゆえに、「人間はどう生きゆくべきか」という根源的課題を背負いながら、学問への貢献だけに留まらず、それらを超越した全人類的な叡智（ポストディシプナリー）を創造していく使命を担っているからである。すなわちそれは、唯単に生活の形態的発展論の立場としてではなく、「生活」の社会的展開の分析、概念の空間的展開の分析、次元的展開の分析を統合しつつ、既存の枠組みを乗り越えて多面的・重層的かつ暮らしの内面の実践から検討していくことが課せられていることを意味しているのである。

当方の研究室では、「生活」を知的探求の主題とする上述の学術の動向に深い敬意を払いつつ、「生活」の学の「未来」を切り拓くことを念頭に置いた「生活

* Emako MIYOSHI
1965年6月生まれ
大阪市立大学 生活科学研究科
博士後期課程（1996年）
現在、大阪大学大学院 人間科学研究科
環境行動学　教授　博士（学術）
TEL：06-6879-8042
E-mail：emako@hus.osaka-u.ac.jp

** Teppei YOSHINARI
1994年6月生まれ
大阪大学 人間科学研究科
博士後期課程（2025年）
現在、大阪大学大学院人間科学研究科
環境行動学　特任助教　博士（人間科学）
TEL：06-6879-4687
E-mail：yoshinari@hus.osaka-u.ac.jp

環境論」を標榜し、世界的な共通課題である環境問題を「人間の生活の次元」で捉えながら、その解決の営みを、様々なレベルでの対話を通じた環境の価値・損失の発見と、価値共有のプロセスとして討究している。すなわち、「世界の各地域で暮らす人びとの視点から、彼らが幸福な生活を営んでゆく上での望ましい環境のあり方をともに考えてゆくこと」を研究理念とし、「生活」を探求しながら自然と共に生きる術を動態的・実践的に模索し続けている。既報[4]でも紹介したように、当方の研究室は、適正技術を開発する理工系の研究者から海外での現地調査を重ねるフィールド調査者まで、文理を問わず多様な人材が集結する極めてユニークな「共進化（Co-evolution）する研究環境」[5]を構築している。近年、社会課題の解決に向けた文理融合がより一層注目されているものの、実際にその多くが、それぞれの専門性を活かした文理の分担・連携というべき体系であると推察される。しかし、当方の研究室では、文理を越えた「融合」にその可能性を見出し、それらの境界を探求しながら、各人が「個人レベルの学融合（文理融合）」を意識し、さらに「研究者間レベルでの学融合（文理融合）」を日常性の中で切磋琢磨しながら挑戦することが、他の文理融合研究とは趣を異にするものと言えるかもしれない。

以上のような、実践志向型の地域研究を基盤とする「生活環境論」は、換言すれば、社会学者の鶴見和子氏が、柳田国男氏の常民民俗学から「つららモデル」、また南方熊楠氏の科学方法論のモデルを「南方曼荼羅」と称しつつ、多系的発展のあり方として提唱した「内発的発展論」の理念[6]の中にその可能性を見出そうとする営為と結び合うよう宣誓するものである。

これまで当方の研究室では、「生活環境論」を基軸に、世界各地域の歴史的・文化的背景を見据えた「人間と自然の関わり」の視座から、多種多様な博士論文を輩出することができた[7]。中でも本稿では、今年、戦後80年を迎える節目であることを意識し、アジア地域史の視座から戦後への連続性を問い直していく意義を踏まえながら、それに関連する3つの博士論文の論考を取り上げて、概説していきたい。加えて、当方の研究室が母体となり、次世代を担う学生たちの主体性に期待しつつ、2023年から大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACTオープンプロジェクトとして展開している「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」[8]を紹介し、その未来への可能性についても触れつつ、まとめに代えていきたい。

アジア地域史の視座から戦後への連続性を問い直す

今もなお続くウクライナ侵攻と激しい戦闘が展開されるパレスチナ情勢を目の当たりにする中で、常に戦いの犠牲となるのは、日常を生きる市井の人々であり、それは広島、長崎への原爆投下や、激しい地上戦が展開された沖縄戦が伝える戦時期の日本の歴史を我々に改めて想起させることになった。周知の通り、今年で戦後80年を迎え、風化が進みゆくこれらアジア・太平洋戦争を巡る体験と記憶は、戦争体験者の直接的な証言が聞き取れなくなる「ポスト体験時代」へ突入しつつある今日、未来世代への継承が喫緊の課題となる。同時に、大戦からの急速な復興と高度成長のピークに達した1970年前後から半世紀の節目を迎えた今日、戦傷病者や公害被害者、在日外国人を始め、経済的繁栄の物語としての既存の戦後史からは見過ごされがちであった人びとが、暮らしの中で直面してきた現実を、「戦後日本」だけに留まらず、東アジア全体が経験してきた歴史の文脈の中に位置付け直し、今日への連続性を問い直してゆく必要性も浮かび上がってくる。さらには、朝鮮半島やベトナムを始め冷戦下の東アジアで生じてきた戦争に鑑みる時、「戦後」という枠組み自体も、それが立脚する「日本」という閉じられた領域を越えて重層的に問い直すことが求められることは間違いない。

他方で、これまで歴史学や社会学の領域を中心に「記憶の歴史化」に光を当て、歴史叙述では見ることのできなかったあるいは見過ごされてきた側面に注目し、新しい視座から歴史を見直そうとする試みがなされてきた。そうした文脈に沿いつつも、我々の研究では、戦後の東アジア地域秩序の再編のなかで、複層的な世界を人々が生きる地域の歴史や記憶を読み解くために、従来のように国家の枠組みから捉えるのみならず、そこから捉えきれない内実にこそ、目を向ける必要性があると考えた。なぜなら、我々が長崎、沖縄、福島、水俣等の暮らしの現場にて調査を重ねる中で、「記憶の継承」を巡り各地域が抱える複雑な現実があり、それらが「戦後」の社会変動の過程で構造的に形成されてきたという看過できない側面も見えてきたからである。加えて、東アジアの冷戦体制とその崩壊という激動する歴史的過程とも軌を一にしてきたことも分かってきた。それゆえに「ポスト体験時代」の記憶の継承に向けて、それぞれの地域に生きる人びとが営み続けてきた戦中戦後の

生活の現場を「複数の歴史空間が重層する場」として捉え直しつつ、それぞれの土地の歴史を背負いながら現在へと向き合い、さらには未来への展望を拓いていくという「連続性」の中から問うことを重んじた。すなわちそれは、戦時から戦後への連続性を人々の生きた歴史として凝視することにより、アジア地域史の視座から戦争・戦後体験の共有とその継承の可能性を討究し、さらにはそれらを生活者の思想的営為として未来に切り拓いていく試みに他ならない。

写真1　沖縄・糸満市（2023年吉成撮影）

以下、本稿では、「「郷土中国」からポスト「郷土中国」の連続性」、「日中「二つの東北」の繋がりと複数の意味」、「写真家たちが受け止め未来に向けて表現し続けた「戦後」の暮らし」という3つの側面から、この重みある課題に挑戦した博士論文の成果より迫っていきたい。

「離土離郷不離農」：ポスト「郷土中国」を生きる中国農民の主体性

中国の社会学・人類学を牽引してきた費孝通氏は、新中国建国前に自ら行った農村調査から、中国社会の本質を「差序」の構造として導きつつ、ここで理念型としての「郷土社会」を提示した[9]。すなわち中国では、個人を中心として、状況に応じて伸縮自在な社会関係が取り結ばれ、かつその内部に血縁関係になぞらえる「差別」と「序列」（すなわち「差序」）に基づく支配―被支配関係が形成されているとみなしていた。ここで掘り下げるべき内実は、「差序」の構造が集団からの個の自立を阻害する一方で、中国の「民間社会」においては、普遍的な価値（「天」）に基づいて、既存の権力の悪政を否定・拒否し、その打倒（「革命」）を合法化する「民本思想」が社会階層を問わずに共有されていたとし、前近代中国における自治的な力強さを民主化の前提[10]と位置づけていた点である。

こうした概念を参照しつつ、中国皖南農村における我々の調査において、流動化が進む中国の農業における施肥行為への深層的意味解釈から、農民の主体性の中に費氏の見いだした思想が現在までも引き継がれていることが次第に見えてきたのである。すなわち、ここで紹介する博士論文[11]は、新中国建国後の激動する社会転換の荒波を生き抜く中国農民の主体性に着目し、長期にわたるフィールド調査を基軸に、これまで独特の方言や生業を通じた固有の語りの壁に隠されていた彼らの内なる真の世界観に接近しつつ、その豊かな経験知が凝集されている施肥行為への深層的意味解釈から、既存研究では固定化され論じられてきた受動的な農民像を刷新し、「農」を通じた主体性とその不抜の思想を明らかにしている。本論文では、「離土」と「離郷」が浸透している中国内陸農業主産地の農民を対象としているが、たとえ、農地や故郷から離れたとしても（離土離郷）、生涯を通して農からは離れない（不離農）という、農民の堅実な生き方の本質を躍動的に描き出している。つまり、農村社会という「大きな物語」では農業の近代化と小農の終焉が帰結であるものの、必ずしもそうした西洋をモデルとした単線的な過程を辿るとは限らない「小さな物語」が多様に存在しており、また現時点では「離土」や「離農」を経験している／した農民であっても、その取捨選択に直面する際の葛藤や応答があり、彼らの生きる糧である「農」という生業を通じた一人ひとりの生活史の中に深く刻まれているのである。

建国後の中国の農村社会は、1950年代から農村全体を巻き込む農業集団化、さらに改革開放以降の1980年代に開始された市場化・生産請負制という2つの段階の大きな社会変革のうねりに見舞われ、それに伴い中国農村の地方行政制度及び農業の生産方式も激変していく。とりわけ近年では、中国農村で深刻化している環境汚染、なかでも農業近代化がもたらした化学肥料の過剰使用と畜産廃棄物の不適正処理による汚染である、いわゆる「農業面源汚染」に注目が集まっている。そうした緊急性の汚染課題への解決策として、トップダウン形式による最新技術の導入や厳格な政策規制による管理体制が施されているために、既存研究では、技術導入やガバナンスの有効性の検討に目が向けられ

がちである。それと同時に、化学肥料の多投問題については、都市社会と農村社会を戸籍で分断する「都市農村の二元構造」の根強い存在、あるいは施肥行為の長期的な安定状態を意味する「習慣的経験」性など、農民の認知の遅れや技術への受動的な態度が、概ね共通の前提となって議論がなされてきた。

しかしながら、現地での参与観察から徐々に掴んできた現実の実態を力に代えつつ、農業生産や「農業面源汚染」問題の中で、農民が主体として関わることが欠かせないにもかかわらず、中国の政府主導型環境政策のもと、農民自体が常に客体化され、受動的な立場に置かれ続けていることに対し、本論文では強い疑問を投げかけている。加えて、こうした中国農民の受動性については、中国農民に関わる諸方面で議論がなされ、構造的格差や農民が受けた「二重の差別」に注目が集まるがゆえに、「弱い」存在や国に喰われる「貧者」というイメージの中に回収され、「固定化された農民像」あるいは「農民の主体の不在」という根源的課題があることも導きだしている。

さらに、ポスト「郷土中国」における「変化」にばかり注目が集まっているものの、その基盤にある建国以前の「郷土社会」からの連続性を持ちながら現在の農業活動や農村社会は、むしろ「郷土」を基盤にした混合的な状態にあり、また継承・蓄積されてきた「経験知」などが見過ごされてきたのではないかとの指摘も加えている。言い換えれば、従来、居住地や職業の移動について「離郷」および「離土」という枠組みから捉えられているが、農業外部門で働く「離土不離郷」や農民工の「離土又離郷」は、季節的な移動である場合や、若い世帯が都市で働き、親世帯が農村で農業を続けるという「世帯間分業を基礎にした半工半耕生計モデル」が普遍的に存在するがゆえに、中国の小農は従来の伝統小農の継続でありながら、「工」や出稼ぎとの関係まで包括的にとらえる必要があり、むしろこのような客体的な象限に区分けできるものではなく、過去を背負って生き抜く農民一人ひとりの生の営みの中でそれらが変化していく複雑な応答を重層的に考察することが重要になるとする。

そこで本論文にて捉えていく農民の主体性は、農民が技術から排除されていく「他者化」と対照的な概念であり、「対象への働きによって可能となった判断に基づき自律的に実践すること」と定義し、それが政策や社会情勢に応じて変化し動態的に応答していく「主体性の可変性」という通時的な視点を盛り込むこととしている。換言すれば、伝統的な自家製肥料の「農家肥」の製造、その使用が近代化の潮流のなかでも存在し続け、農民の生活の全体に関係しているために、「農」を見るうえで施肥行為の経験知、特に「農家肥」への考察が欠かせないのである。さらに農民が社会変動の荒波の中で生存を確保するために構造的変容に応じながらも、いかにして農業における主体性を活かしていたかについて立体的に検証していくために、本論文では、日本で誕生し、農村社会学・環境社会学における主要な分析枠組みの一つであり、主体である「生活者」の立場に寄り添う「生活環境主義」、及び農業社会学において議論が積み上げられてきた「主体性論」を参照している。そしてこれらを包括して本論文では「生活論的アプローチ」と位置づけ直しながら、地道なフィールド調査により、目に見える複数の選択肢とその行為の奥にある農民の「経験」にまで降り立つ解釈的アプローチにより堅実なる論証を果たしている。

ここでもう一つ重要になるのが、農民の生活者としての「主体性」を考察していくために、本論文では、単なる経済目的で営まれる産業としての「農業」を超えた部分があるとして、それと明確に区別しながら、命の種という意味が内包される生業としての「農」に着目している点である。それゆえに、既存の農民研究では捨象されてきた特殊な形態としての「アウトロー」的な「農」は、特に近代化の途上に置かれる農民の生活者としての特殊な一面として再考すべきであると捉えている。加えて留意する点として、中国農民の主体性を考察するには、農民の言語で構築されている意味世界に接近しなければならないことである。中国の高齢農民の識字率や方言といった状況に鑑み、また本論文で明らかにされるように、農民の主体性が、実際には言葉や行為に直接的に表現できない状況になっており、単に中国語の標準語（北京語）、特に書き言葉や「科学知」を基礎にした調査からでは辿り付くことができず、農民の実際の考え方や感覚（経験としての生）がかならずしも十分に口述され、また残されてきたとは限らない。つまり「経験としての生」があるにもかかわらず、「語りとしての生」が記録されなかった側面に本論文は光を当てているのである。

本論文では、とりわけ、中国内陸農村出身の70代以上の農民のライフストーリーから、農民の「農」と「農業」をめぐる葛藤を描き出している。「離土」や「離郷

」の際、農業を最後まで堅持したい矛盾、及び省力的な近代農法と効率を重視しない農家肥を使用する伝統農法の農法選択上の葛藤の中で、農民は種々な制限を受けながらも、巧に生計を立て、主体的に農家肥の使用や農的な暮らしを維持しており、これこそ農民の主体的選択によるとする。一方で、既存研究における農民に対する評価や農民像は、経済や量の大きさで可視化されやすい「農業」に基づいたものであるがゆえに、最も重要な「農」は逆に見落とされてきたのではないかとの推察を加えている。それゆえに、本研究のライフストーリーから見えてくるこのような農民の姿こそが、中国における「新たな農民像」として提言しつつ、結論へと結実している。

本論文における重要な成果は、ポスト「郷土中国」ならではの農民の主体性の様態として「潜在性(Potential autonomy)」(時代と共に変化し見えなくなっているが、経験レベルに埋もれた主体性があること)並びに「隠在性(Hidden autonomy)」(農民の「主体性」は、方言の壁といった原因により他者から認識されず、また政策から排除されてしまっている)を提起しつつ、新たな中国農民像としての「離土離郷不離農」という視角を明確化したことである。すなわち「施肥行為」という外在的形式を手がかりに地道な調査を継続することにより改めて見えてくる事柄があり、「郷土中国」からの連続性の途上を生きる中で、土との深いかかわりの歴史から培われた経験知および土地への執着にこそ、「農」の内面化された本質があることを実証し、他の追従を許さぬ論考となっている。

柳田国男氏の語り草となっている「村を美しくする計畫などいふものは有り得ないので、或は良い村が自然に美しく、なつて行くのでは無いかとも思はれる。」という言葉は、こうした中国農村を考える時にも当てはまるものと考えられる。すなわち、美しい村を作るというよりも、良い村自体が美しいのであり、それは現場において農に生きる沢山の農民が身をもって我々に学ばせてくれた証と言えるであろう。

日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践

1980年代後半から、日本の地方社会における深刻な「男性結婚難」という現状に伴い、アジアから日本に結婚移住してきた女性の問題が注目されるようになった。そして2000年代までは受け入れ側である日本社会の視点に注目が集まり、「外国人花嫁」が日本の地域社会にもたらす影響に焦点が当てられていたものの、それ以降は、女性の「生活者」としての主体性を重視しつつ、送り出し社会の文脈も視野に入れられるようになってきた。　ここで紹介する博士論文[12]は、旧満州の歴史的記憶を引き継ぐ中国東北部において、80年代以降の「単位制社会」の弱体化に伴って結婚移民となり日本の福島に移動してきた50代から60代の中国人女性に目を向け、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生き抜く女性の「歴史実践」について、彼女らの主観的意味世界に接近しつつ、対話的構築主義によるライフストーリー法により読み解く論考である。3・11震災における地域の外国人への関心を契機に、7年前より福島で調査を始めているが、そこで気づいたのは、この地域に長年に暮らしている中国人は、主として結婚移民の女性であり、中でも中国東北部出身者が圧倒的に多いという現実であった。すなわち、日中国交正常化により1980年代に中国残留日本人の帰国が始まり、彼らや呼び寄せられた家族を中心に日本人との人脈ネットワークが形成されながら、かつての「満洲」の歴史現場である中国東北と日本を繋ぎ続けていたのである。しかし、こうした女性たちの多くは、片言の日本語しか話せないまま移住してきており、長い間日本で暮らす中でもいまだに簡易な日本語を駆使して暮らしている。また日本人の夫が家の長男ゆえに義父母との同居と介護を担うことが一般的であり、夫の苗字を冠した日本の名前を使って暮らしているため、地域の中国人同士であっても互いの本名を知らないことは珍しくないという。

他方で女性たちにとって、「先進国としての日本」のイメージを抱きながら意気揚々と日本に移住したものの、移住後の生活は、思い描いていた「幸せな人生」とは異なるものであった。彼女らは「満洲」時代を直接経験した世代ではないものの、日本への移住経験を通じて、日常生活の中で福島に住む満洲経験者との出会いにより、改めて幼い頃から中国東北部で無意識に体感してきた「満洲」の痕跡が蘇ってくるのである。それゆえに彼女らが母国で学んできた「帝国主義的侵略―民族的抵抗」を軸に語られる国家記憶の構造的権力の存在を意識しつつも、複層的に見えてくる「満洲」像を日々の暮らしの中で自ら模索し続けていたのである。こうした彼女らの姿から徐々に理解されうるのは、女性たちにとって「満洲」が単なる過去の歴史に留まるものではなく、中国東北部の独特な土地柄と日本の東北部

の移住経験を内面化しつつ、現在の暮らしの中で常に過去と関わりながら、「満洲」の記憶を主体的に築いていくことであり、まさに「歴史実践（doing history）」[13] であった。

ただし、ここで見過ごしてはならないのは、中国東北出身者の女性が自発的に「インフォーマルな形」で集まりながら支え合い、主体的にネットワークを構築していることである。3・11震災直後の混乱下にて多くの外国人が帰国する中で、家族のために福島に留まり続けなければならなかったことも少なくなかったが、言語の壁がある上に、被ばくや子供の安全への不安が高まる中で、彼女らは中国人同士の人間関係により自発的に集まりながら相互扶助のネットワークを形成していったのである。こうして震災を契機に形成され地域に点在する女性ネットワークは、それ以来、女性がリードする地域団体として発展したものもあるが、こうした集まりの場において、彼女らは生活の悩みや喜びを共有しながら相互に支え合う姿があった。ただしその背後には、かつての「満洲」からもたらされた傷跡と重ね合わせるかのように、移住後に待ち受ける彼女らが一人では抱えきれない様々な辛さがあることも見えてきたという。それにもかかわらず、彼女らが日本の東北であるこの地に根を張って暮らしを営み続けているのは一体なぜなのであろうか。この根源的問いに向き合いつつ、調査を続けながら、彼女らの経験の語りに耳を傾けていった。

写真2　福島・浪江町（2024年吉成撮影）

加えて、戦争の痕跡を受け止めつつ災害を乗り越えるために、日中「二つの東北」の痛みに向き合いながら生を営むという選択をする中国人女性たちについて理解していくために、「記憶」という目には見えにくい「満州」の歴史的文脈を念頭に置きつつ、さらにより彼女らの来歴や人生経験そのものに注視していくために、移動の端緒となる、かつての「満洲」が残した工業遺産を基に発展してきた中国東北の「工業単位制社会」の弱体化も重要な手掛かりとした。

こうして本調査を進めていく上で、極めて重要になるのが、女性たちの移動を介した経験というものは、客観的に我々が捉えられるというよりも、むしろ彼女らの「語り難さ」の中にあるという側面に目を向けていることである。母語の中国語を用いたにもかかわらず、女性たちの話の端々に躊躇や沈黙、微かな抵抗感が見え隠れしており、こうした対話の不調和をそのまま見過ごしてしまうと、語りの表層的な理解に留まってしまうために、経験の語りの奥にある目に見えないものも含めた主観的な意味世界について、時間を掛けて対話し理解していくことを繰り返した。その結果、そうした「語り難さ」が、彼女らが生きる「東北」という社会に潜む複数の権力構造と深く結びついていることも分かってきたのである。

以上の結果、国境を越えた生活の本当の「豊かさ」とは何かを模索しながら展開される女性たちの日々の営みが、「単位制」の弱体化や戦争の痕跡という、双方の「東北」の痛みを受け止めつつも、日中の尊い「結び目」となりゆく「歴史実践」であることが次第に見えてきたのである。

従って、本論文では、「二つの東北」の複数の意味を再確認することができた。一つは、論考の中で一貫した姿勢を見せることにより、結婚移民として日本の東北の暮らしで感じたことが、かつて中国東北での暮らしを思い起こさせ、双方の東北での経験を自ら応答しつつ理解しようとする女性たちの姿を表現することができた。それを踏まえつつ、二つ目として、さらに、「南方」と「東京」という対極にある「周辺」としての二つの「東北」が共有する痛みの意味が見えてきたことである。ただし彼女らにとってそれは容易なことではなく、3・11震災を契機に立ち上げられた女性ネットワークが示すように、共に味わった悲痛な震災経験が、彼女らを「よそ者」から地域社会に受け入れられる存在へと変え、そこから初めて、地域との絆を深めながら、互いに知り・理解し・支え合うようになったのではないかと推察される。この意味において、震災経験は、図らずも彼女らが日本東北地方の重層的な歴史を知ろうとする情動的な起点ともなり得たと言えるかもしれない。そして上記でも触れたように本論文では、満洲移民など特定の歴史的出来事に焦点を当てるのではなく、あくまでも3.11災害を経験し

た中国人女性たちへの暮らしの調査から出発している。ただし、加害 / 被害の視点に立たないからこそ、調査を続けていく中で、国際結婚を機に日本の東北の地に来たものの、過去から現在に引き続く傷跡を重ね併せながら、さらに災害をも経験した女性たちの営みに重要なもう一つの意味が見えてきたと考えられる。すなわち、「二つの東北」の三つ目の意味は、彼女らが日々の生活の中で受け止めてきた双方の「東北」の痛みというものが、国境を越えて移動する一人ひとりの生活者として、東アジアの歴史の連続性を実感させるものであり、それゆえに国境を越えた生活の「豊かさ」とは何かを模索しながら展開される日々の営みが、尊い「結び目」となり得る可能性を示唆することができたのである。

「東北学」を提起した赤坂憲雄氏は、鶴見和子氏との対談[14]の中で、次のように語っている。「この対談のレジュメの中に、「内発的発展論では、国家という単位を離れて、地域を単位にした発展のあり方を模索した。東北学においては、どのような単位で東北をみていようとしているのか。県、都市レベル、もっと大きなあるいは小さな単位だろうか」という問いかけがあります。･･･地域というのは暮らしとか生業の舞台としては、限りなく小さなムラを起点としてはじまる。けれども、その地域がみずからの内にはらんでいる文化の多様性というものを眺めていると、それはものすごく広い、可能性としては国家を越えているような領域にひろがっているということでしょうか。･･･それがアジアに向かわざるをえない、自分の中の必然のような気がするんです。」と。本論文で論じてきた女性たちは、自らの暮らしの舞台とした「地域」に根差した日々の営みを通じて、国境によって閉ざされることのない、人と人とが様々な形で交錯していることを教えてくれたのである。まさにこれまで見過ごされてきた「二つの東北」における戦後の陰に接近しつつも、災害を乗り越えていく中国人女性たちの行為主体性から描き出すことにより、アジア地域史における新たな営為を見いだしたと言えるのではないだろうか。

「写真実践」より拓かれていく、見過ごされてきた「戦後」の暮らしとその重み

ここでは筆者のひとりである吉成哲平の博士論文[15]を紹介していきたい。本論文は、「戦後」という自明とされがちな枠組みにより見過ごされてきた様々な人びとの暮らしを見据えつつ、「写真実践」という独自の方法論を開拓し、同時代を共に生きた写真家たちの当時の視点へと接近することにより「戦後」の生活者の思想的営為を討究するとともに、現在への連続性を問い直しながら「記憶の継承」として未来へと拓いていくことを論じた作品である。

本論文では、「ポスト体験時代」へ向かう今日において、「戦後」を問い直す必要性を改めて認識した上で、「写真実践」という独自の方法論を提起している。この方法論は、吉成自身が表現活動を続けてきた写真家でもあるというその素養を活かしつつ、目の前の現実と全身で向き合い、次々に過去となりゆく出来事への応答の中で撮り続ける行為を通じ、やがて自らの思索を深化させる経年的実践に目を向け、写真家たちが遺した多様な表現媒体から立体的に辿り直すことで見えてくる内実を具体化するものである。

今からさかのぼること半世紀前の1970年前後は、東西冷戦下でベトナム戦争が続いていた60年代後半にアメリカがベトナムへの北爆を開始し、戦争が一層激化する中で、1964年の東京オリンピックに続き70年には大阪万博が開催され、名実ともに戦後日本は経済大国化へと突き進んでいった時期でもあった。そうした時代の潮流において世界的にも学生運動に揺らいだ1968年は、日本では1868年の明治維新から100年という節目にあたり、政府主催にて「明治百年記念式典」が挙行されることで、以来約1世紀の近代国家としての日本の発展が国を挙げて慶ばれていた。同時に日本写真家協会の主催にて「写真100年―日本人による写真表現の歴史展」が開催され、写真史における重要な出来事と位置づけられ、それが写し出した近代日本の歴史への反省は、職業的写真家だけに留まらず、同時代のアマチュア活動へと広く衝撃を与えていったのである。にもかかわらず、写真に関連する既存研究では、当時の写真家自身の持つ「表現意識」への懐疑とその反面での匿名的な「記録」の肯定という概して定型的な文脈から論じられており、写真家たちが向き合った1970年前後の現実とその心の内が見過ごされてきたという課題が残ることを指摘したい。それゆえに、「昭和元禄」とも呼ばれた一見すると平穏な日常の中にあって、繁栄する社会の実情を人々がどのように捉えていったかを見過ごしてはならないとし、その解明のために新たな方法論「写真実践」の重要性へと接合していく。

本論文における「写真実践」の分析の中心となるのが、「戦後写真の巨人」として評される東松照明(1930-2012)の表現活動である。東松は、戦前に生まれ、

敗戦を契機に進行する日本の「アメリカニゼーション」を米軍基地のある街の風景から捉えた「占領」シリーズをはじめ、1950年代中頃より半世紀以上にわたり戦後日本を撮り続けた写真家として知られる。ただし既存研究において、東松の活躍してゆく60年代の写真表現については、それ以前の表現と一線を画する、「個」としての視点から表現された映像自体のインパクトやその象徴性のみが特徴付けられ、東松自身については、「土着的」な視点から戦後社会を批判的に捉える写真家として見なされてきた。とりわけ、「組写真」というストーリーを重視する前世代までの表現方法とは自らも強く区別してきた、東松独自の表現である「群写真」の分析については、撮影者である東松の思索とは非意図的に切り離され、概してある誌面上の写真と写真の組み合わせである「編集」とそこから浮かび上がる象徴的なイメージにのみに焦点が当てられ、議論がなされてきたのである。

よって本論文では、「写真実践」より東松照明の生きた視点に立つことで、彼が表現し続けた「戦後」の生活者の実相の内実とその思索の深まりがもたらす未来への意味を具体化することを試みている。60年代初頭に初めて長崎を訪れた東松は、戦後も見過ごされたままの被爆者の厳しい生活に直面したことに鮮烈な衝撃を受け、撮影への葛藤を抱えつつ、晩年まで長崎の現実との「距離」を埋めてゆくことへと突き動かされていった。また、「復帰前」に訪れた沖縄で施政権返還が決定的となる中で、沖縄のひとびとの希求する「平和憲法」が空文化し、民主主義への無関心が広がり、各地で公害が噴出する本土の現状への矛盾と葛藤を抱え、それゆえに東松は本土に暮らす「私たち」への問いとして沖縄の現実を拓こうとしていたのである。さらに復帰後の沖縄で東松が表現し続けていった人びとの暮らしの実相については、観光リゾート化の影で見過ごされていく沖縄戦とベトナム戦争という二重の「戦後」の現実にも直面しながらも、沖縄で生まれ育った写真家たちの表現に期待を寄せつつ、それぞれの立場から沖縄の生活の現実を表現し続けたことを明らかにしている。すなわち東松の軌跡から浮かび上がるのは、敗戦後の「アメリカニゼーション」がもたらした社会変容に直面しつつも、東アジアに開かれた重層的な歴史の上に各地域で営まれ続けるひとびとの暮らしであった。他方で、このような解明には、吉成自身の現場での再帰的な撮影行為が不可欠となり、さらにそれを介することにより、今を生きる人々に東松が託した「戦後」の記憶をいかに継承し得るのかについて、未来への展望を拓くことを可能にしているのである。

以上を踏まえつつ、本論文全体から浮かび上がるのは、敗戦から豊かになっていく社会の影で見過ごされてきた人びとの暮らしの中で抱え込まざるを得なかった矛盾や葛藤であり、それでも各地域の歴史の上に脈々と続いていった暮らしの営みであったと言える。つまりそれは、鶴見俊輔氏が論じたように、戦中と敗戦の記憶を暮らしの中で保ち続けながら「戦後」の現実と向き合いつつ、現状に対して出来る限りのことを続けていく「弱い個人の重さ」へと拓かれていくものである。

さらに東松は、晩年、以下のように述べている[16]。「チャンポン、チャンプルー。これは長崎の魅力であり、沖縄の魅力でもある。ある種の文化のごちゃ混ぜというか、歴史のごちゃ混ぜ。今日のテーマでもある時間もごちゃ混ぜにしてしまう。過去も無ければ、未来も無ければ、現在も無い。こういうものを全部一緒くたにして、ぐつぐつ煮てしまうというような、そういうチャンポン文化。それでまあ、私の「マンダラ」という展覧会が行われるようになった。それまではテーマ別に並べていたものを、今回は全部チャンポン風にして出してしまったという。・・・言葉を換えるとマンダラというのはチャンポンなんですよね。」と。東松は、沖縄での経験を背景に移住した長崎での「町歩き」を通じて、キリシタン信仰や中国との結びつきなど、数世紀にわたり培われてきた長崎の町の「チャンポン文化」に魅せられつつ、長崎や沖縄、中国を結ぶ東シナ海を巡る重層的な歴史を次第に受け止めていったことが明らかとなった。

なお、方法論的観点から付け加えるならば、「写真実践」による分析は、従来の写真史・写真論や映像民族誌等の関連研究の視角との差異化を図りながら、生活史や近現代史、あるいは社会運動論等の接点を模索しつつも、更なる領域横断的な議論へと切り拓くことを試みている。とりわけ、柳田民俗学の心意論や70年代の大衆文化論に大きな示唆を受けつつ、石田忠氏の長崎被爆者の生活史研究、鶴見和子氏の生活記録運動、さらには鶴見俊輔氏や小田実氏らの生活者の思想との緻密な応答を図ることにより、「戦後」を捉え直す新たな方法論としての精緻化に成功している。それゆえに写真家の表現活動の足跡を「写真実践」から分析する意義は、見えない未来を見据えながら、過去のその時点において人々がどのように葛藤しつつ生

活しているのかという、彼らが直面した現実について、プロスペクティブな視点から、いつか写真を目にする未来世代へと託されているという、その撮影表現への深い理解である。すなわちそれは、「結果の権力というべき「強い歴史」の効果」によって「できごとを観察し、追跡し、裁断する危険」に対し常に反省的である必要があるとする社会学者の佐藤健二氏が示唆する「歴史内在的な理解」[17] とも響き合うものでもある。

以上のように、本研究における学術的功績は、「写真実践」という独自の方法論の開拓にあり、さらにそれは「生活者」の思想的営為という普遍性を見据えながら、人間にとっての「生活」を探求する研究領域として体系化され、諸学の対話を取り戻す役割を果たす可能性へと拓いているものである。はじめにで触れたように、人々の生活を基軸に諸学と対話し得る新たな体系的学の創成は、いまだ途上にある。それゆえに「写真実践」から描き出される生活者の思想とその営為は、その時代・社会背景や歴史的潮流の中に埋没するものではなく、再びまなざされる「未来」に向けられているという、写真家の表現活動を介してこその重要性が秘められている。つまり、写真家の生活史そのものを描くこととは異なり、写真家とその被写体との間で、撮影を通じて経年的に築かれた関係性や見出された内実を、分析者が様々な表現媒体を通じて再構成し、自身の再帰的解釈も加えながら「二重に焼き出すこと」へとつなげている点が重要になると考えられる。すなわち「写真実践」の方法論から生み出される普遍的価値は、広く近代知によって失われた全体性、複雑性、多様性、内発性等の回復を試みるものであり、それは「ポスト・デシプリナリー」の極致を希求するものである。

「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」から拓かれる未来

上述したように、戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくために、「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」を立ち上げた。その根底には、第二次世界大戦後の東アジア地域秩序の再編による歴史の重層性を踏まえながら有志の教員により2007年設立された「大阪大学中国文化フォーラム」の精神[18] が受け継がれている。すなわち、東アジア地域秩序に関わる諸課題は、従来の国家間関係のもとではもはや解決しえないことを認識しつつ、本フォーラムでは、東アジアの国際公共財形成への基盤として、「人間の安全保障」にひとつの方向性を見いだそうとして活動を続けてきた。そして設立以来、日本・中国大陸・台湾・韓国における国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」を十数年に渡り経年的に開催しており、face to faceの相互の信頼を糧に、一年また一年と国境を越えた対話を地道に続けてきたプロセスがあるからこそ身をもって実感するのは、21世紀の東アジア地域において、20世紀のような「戦争」により分断されることのない、紛争や対立を生み出さない「アジア地域史像」の構築であり、未来世代に引き継ぐべきことは、争いのない平和であるという願いを深めてきたのである。

この「記憶の継承ラボ」では特に次世代を担う学生たちの主体性に期待しながら、長崎、沖縄、福島、水俣など各地において平和活動に尽力する現場の実践者たちとの交流活動を通じて、アジア地域史の視座から戦争・戦後体験の意味を問い、未来への展望を描いていくために、国境を越えた対話（グローバル・ダイアログ）と連帯への可能性を生活の次元から模索していくことを目指している。

これまで各地の現場から貴重な示唆を得てきたのは、体験者と非体験者を繋いできた実践者たちの「伴走者」としての重要性であり、彼ら彼女たちが日常の暮らしの中で体験者を支えながら受け継いできた生活者の思想的営為の重みである。すなわち、各地域において脈々と紡がれてきた戦中戦後の切実な体験と記憶を、今日を生きる私たち一人ひとりが受け止めつつ、その距離を埋めようと絶えず模索していく過程にこそ、「ポスト体験時代」における記憶の継承の可能性が拓かれていくことが見えてきた。

とりわけ、長崎にて被爆校舎から原爆の実相を伝え

写真3　城山小学校平和祈念館（2021年吉成撮影）

継いでいる城山小学校平和祈念館（写真3）の語り部の方々との出会いからは、身命を賭して被爆体験を伝え続ける被爆者と、彼ら彼女たちと共に生きてきた人びとが、「長崎を最後の被爆地に」という志に突き動かされるようにして、原爆体験の継承を託してきたという重層的な時間の厚みを受け止めてきた。

また、「基地の街」、「戦後沖縄の縮図」と形容される沖縄市に位置している沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」（写真4）への訪問を通じて、沖縄戦後に様々な背景を持ってコザに暮らす一人ひとりの模索やエネルギーにより街がつくられてきたという、現在へと連なる戦後史とその複雑さについて、市史編集に日々尽力する職員の方々から諭されてきた。

このように、「記憶の継承」にまつわる各地の現場との交流を深めていく中で、2023年には城山小学校平和祈念館の山口政則氏と松尾眞一郎氏をお招きし、シンポジウム「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ」を開催した。さらに、昨年2024年には沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」に携わる恩河尚氏と伊敷勝美氏をお迎えし、シンポジウム「ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―」の開催も実現することができた。いずれも国内外から100名近くの参加を得ていることに加えて、これらのシンポジウムの総括としてそれぞれ刊行したブックレット[19),20)]も多くの読者に届いており、年々関心が広がっていることを大変有り難く受け止めている。

写真4　沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」
（2024年吉成撮影）

以上の貴重な基盤を活かしつつ、大阪大学グローバル日本学教育研究拠点・拠点形成プロジェクトとして、「東アジアへ拓かれた「戦後日本」の記憶の継承：地域間を結ぶ対話と歴史実践の拠点構築」を今年度より新たに立ち上げることができた。これまでの現場から見えてきたことは、戦中戦後の歴史を伝える記録資料の収集保存および体験者の貴重な「語り」の聞き取り等に実践者たちが試行錯誤を続けてきた一方、「ポスト体験時代」に突入する今後も活動を持続させていくために、さらに他地域における継承活動の経験との応答や連携を希求していることであった。それゆえ、本プロジェクトでは各地の現場を結びながら東アジアの「戦後」を共に問い直していく対話の基盤を、特に戦無派世代の若手研究者たちを軸に据えながら構築することにより、異なる背景を持つ人々へと各地での記憶の継承の営みの連帯をともに実現することを心している。これは同時に、私たち個々人が日常の暮らしの中でアジア地域史を受け止め直していくという「歴史実践（doing history）」を可能にするものであり、さらに、「加害／被害」の対立構図の中に回収されがちな戦中戦後の複雑な記憶を、他者と「共にある」という生活者の思想的営為から紐解き直すことは、東アジアの歴史和解を促進していくことが期待され得るものである。

参考文献

1) 中鉢正美：『被爆者生活の構造的特質―広島地域における面接調査を中心として―』，『三田学会雑誌』，61巻12号 pp.1-28（1968）
2) 石田忠：『反原爆：長崎被爆者の生活史』，未来社（1973）
3) 日本生活学会設立趣意書：
https://lifology.jp/overview/syuisyo/
4) 三好恵真子：「“共進化（Co-evolution）”する研究環境～実践志向型地域研究による課題解決の試み～」『生産と技術』，Vol.70, No.4. pp.33-38（2018）
5)「共進化」とは、元々は生物学の用語であり、「複数の生物種が相互に影響を与えながら環境への適応能力を高める方向に進化する」ことである。つまり、単独進化に比較して、より優れた行動を導くことができるということを意味している。換言すれば、こうした環境は、何か理想や目標を掲げてそれへの到達を目指すという方向性とは異なり、いまを生きる一瞬一瞬を受け止め、お互いに影響し合えるその環境を活かしながら、未来に繋いでいくということになると考えている。
6) 鶴見和子：『鶴見和子曼荼羅 IX　環の巻―内発的発展論によるパラダイム転換』，藤原書房（1999）
7) 当方の研究室から輩出した当該博士論文として、次

のようなものが挙げられる。

・姉崎正治：『貴金属鉱業における金、銀、水銀に関する資源・環境問題の歴史的射程から未来へ連動する文理融合研究―ポトシ銀山技術の再評価および小規模金採掘の地域再生、都市鉱山の開発を包摂する持続可能性原理の討究―』大阪大学，博士論文（2015）

・胡毓瑜：『中国舟山群島新区における漁業資源の保護・修復を目指す文理融合研究―漁民の生業と漁業制度との関係性並びに数理解析による包括的討究―』，大阪大学，博士論文（2016）

・松村悠子：『島嶼の視座から討究するエネルギー自立に関する実践研究』，大阪大学，博士論文（2018）

・西川優花：『イラン・ヴァルザネに生きる人々の生態史―ザーヤンデルード下流域における生業を通じた重層的な資源管理と利用』，大阪大学，博士論文（2020）

・金吉男：『中国における廃棄物処理施設をめぐる紛争に関する環境正義論的考察―構造的不正義による環境不正義の連鎖』，大阪大学，博士論文（2022）

・許俊卿：『中国における PM2.5 問題をめぐるメディア報道とリスク認知に関する包括的実証研究 ―双方向的なリスクコミュニケーションの視点 から見出された市民の主体的な認知過程―』，大阪大学，博士論文（2023）

8) 大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター・IMPACT オープンプロジェクト「記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ（記憶の継承ラボ）」HP https://relay-memories.hus.osaka-u.ac.jp/

9) 費孝通：『郷土中国』，上海観察社（1947）

10) 水羽信男：「近代中国「民間社会」史再考 ―日本との比較―」『アジア社会文化研究』12, pp.107-117（2011）

11) 張曼青：『ポスト「郷土中国」を生きる中国農民の主体性 ―生活論的アプローチから討究する「離土離郷不離農」―』，大阪大学，博士論文（2023）

12) 王石諾：『日中「二つの東北」を生きる中国人女性の移動をめぐる歴史実践―戦争の痕跡を受け止めつつ震災を乗り越えようとする一人ひとりのライフストーリー―』，大阪大学，博士論文（2025）

13) 保苅実：『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店（2018）

14) 赤坂憲雄・鶴見和子：『地域からつくる：内発的発展論と東北学』，藤原書店（2015）

15) 吉成哲平：『写真家 東松照明らが表現し続けた生活者の思想的営為―「写真実践」より拓かれていく見過ごされてきた「戦後」の暮らしとその重み―』，大阪大学，博士論文（2025）

16) 東松照明・今福龍太：「対談録「長崎の美術―写真／長崎」展開催記念　対話：長崎の『時』」(2009)

17) 佐藤健二：『歴史社会学の作法―戦後社会科学批判』岩波書店（2001）

18) 詳細は以下を参照されたい。田中仁・三好恵真子 編：『共進化する現代中国研究―地域研究の新たなプラットフォーム』大阪大学出版会（2012）

19) 三好恵真子・吉成哲平 編：『記憶の継承を祈念するグローバル・ダイアログ』OUFC Booklet Vol.18, 大阪大学中国文化フォーラム (2024) https://hdl.handle.net/11094/94661

20) 三好恵真子・吉成哲平 編：『ポスト体験時代の記憶の継承―アジア地域史の視座から祈念する私たちのダイアログ―』OUFC Booklet Vol.19, 大阪大学中国文化フォーラム (2025) https://hdl.handle.net/11094/100627